

台湾原住民族運動の回顧と展望

—加えてツォウ族の運動体験について—

汪 明 輝 *
(tibusungu'e vayayana, peongsi)

I. 前 言

1980年代から、当時、山地同胞あるいは山地人と呼ばれた台湾南島民族原住民族 (Austronesian) は、「原住民族運動」をはじめましたが、1990年より以前においてこの運動が矛先を向けたのは、主に社会経済問題に対してでした。運動の特色は、原住民族が社会の低層に置かれていたために労働者階級運動の性質をそなえたものであったという点にあります。当時の主張と訴えは、主流社会から支持を得られただけではなく、国民党政府に憲法の修正を認め、原住民族の行政機構の格を上げ、原住民族にかかわる政策を改めざるを得ないようにさせたのでした。三度に及ぶ「わたしたちの土地を返せ運動」[還我土地運動]の後、民進党が執政を担っていた台北市政府 (当時の市長は、現在の台湾総統、陳水扁) は、まず原住民事務委員会を設置し、翌年、国民党中央政府行政院内に行政院原住民族委員会を設立しました。こうした動きを契機として、多くの原住民族運動のリーダーが政府あるいは政党の政務官、そして党の原住民族の代表に加わりはじめました。こうして、原住民族運動がすでに成功している

ことを明示しているかのようでした。しかしながら、原住民族運動は決してこれでは終わらなかったのです。1990年以後、原住民族運動は形を変えて「部落主義」へと転化し、原住民族運動の戦いの場は原住民族の故郷の部落 (コミュニティ) に移りました。と同時に、世紀末に台湾中部大地震 [9.21 集集大地震] が発生して、ふたたび原住民族問題をゆさぶりました。この時、原住民族は民族議会、民族の自治および原住民族と政府の間の国族と国族の関係 (nation to nation) を提起しました。陳水扁はすでに市長から転じて総統選候補者になっており、原住民族と「原住民族と台湾政府の新しいパートナーシップ条約」 [原住民族与台湾政府新的夥伴關係条約] に調印しました。2000年、陳水扁が総統に当選することによって、この条約は新しい政権党の原住民族政策の青写真となりました。このような状況ではありますが、原住民族運動はやはり自主的な発展方針と目標を持っています。その成否については、原住民族自身が実践し、力強く行うかどうかをきちんと見ていかなければならないのです。政府や原住民族運動を支持してくれる漢族の人々は、傍から援助することしかできないのです。

自我の定位 [どのように自己を位置づけるか]

台湾の原住民族は、外来民族の政権統治を

* 国立台湾師範大学地理学系副教授・立命館大学地理学専攻客員教授 (2006年4月～7月)

数百年來受け、深刻な植民地的状況の中に置かれてきました。そのために、原住民族がどのように自己を位置づけるかということも、決して一様ではありません。統治者の態度と自我の置かれた状況の理解について、簡単に言えば、ほぼ以下のように分けることができます。第一類は同化論 (assimilationism) あるいは現代主義論 (modernism) および国家主義論 (statism) です。第二類は分離論 (separatism) あるいは伝統主義 (traditionalism) および民族主義論 (native nationalism) です。第三類はその中間にあって迎合したり、同化に傾いたりしているのですが、これもまた国家主義者なのです。第四類もその中間にありますが、同化を拒絶し、分離に傾いています。植民地化された原住民が現実の政治状況の中にいて、全くの分離論はもう稀にしかないようです。筆者自身による行きつ戻りつ思考したこれまでの論述をふり返りますと、原住民族は国家を持たない民族 (nation without state) である、しかし、民族国家 (nation state) と対等の関係であるべきだ、ということなのです。

本稿ではまず簡単に原住民運動の発展のプロセスをふりかえって、そこに内在した言説について検討を加えます。それとともに、ツォウ (鄒) 族を例に、筆者によるこれまでの「デスクワークによる運動への参加」からの経験と考えを説明したいと思います。

II. 台湾原住民族運動の発展のプロセス：台湾エスニックグループの政治背景

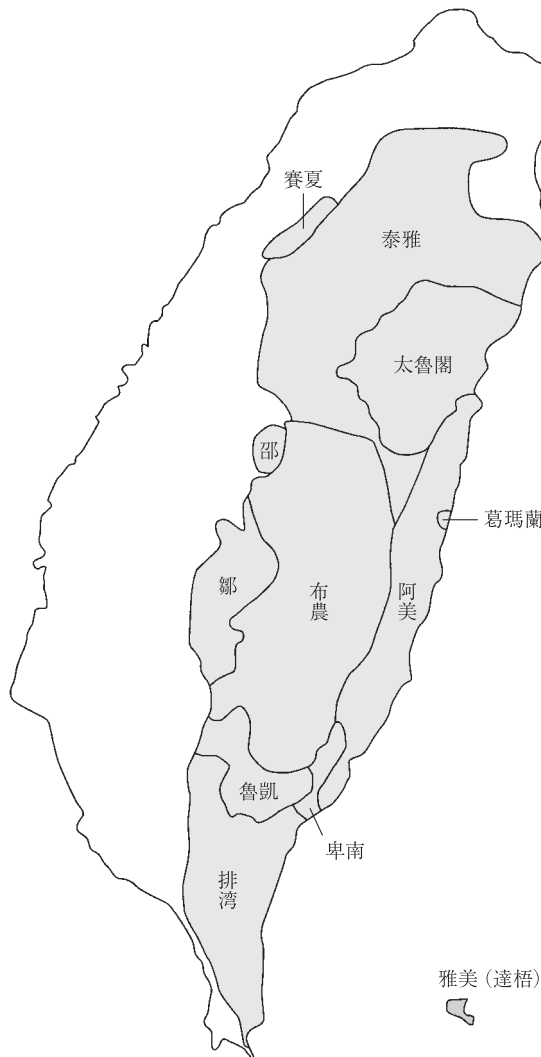
台湾原住民族運動には、グローバルな発展という横軸と、長期的な歴史の脈絡という縦

軸があります。さらに、台湾島内の特殊なエスニックグループ [族群] による政治的構築という因子があります。簡単に言えば、台湾島は四方が開かれた環境におかれているために、西太平洋の交通の要所の位置にあり、昔から四方の民族の移動拠点となっていました。航海に秀でた大洋洲南島民族が、異なる時期に、異なる本源から、異なる場所で台湾島に上陸し、長期にわたり互いに勢力を拡大したり減少したりしました。そして、台湾に現れ、それぞれが土地を占有してきました。エスニックグループは大きかったり小さかったりしたのですが、それぞれが自分たちの知恵と環境資源によって特有の生活様式を發展させ、多様な文化形式とその内実をかたちづくってきました。人類学者や言語学者の視点から、かれらの言語の違いについて、ここでは論じませんが、けれども南島民族の大家族の中に属していたといえます。この民族分布は太平洋、インド洋に広がっています。最北が台湾にあたります。極東は南米のチリの近くにあるイースター島で、南はニュージーランド、西はアフリカ東海岸のマダガスカル島に及び、数億の人口を有しています。

現在、台湾当局に認定されている 12 の原住民族の方言が 42 あることにもとづきますと (一般に言語学者 Ferrell にもとづくと、12 の民族は平埔族のなかに含まれ、実際には三つの語族にまとめられている。つまりタイヤル語群、パイワン語群、ツォウ語群である)、言語がこのように分岐している (12 の民族の間ではコミュニケーションができないだけでなく、同一の民族内でも甚だしくは方言ごとにコミュニケーションできない) ことを、言語学者たちは学説にしています (第 1 図・第 1

表)。その学説とは、台湾は広大な南島語族の発信地であるというものです（たとえば台湾中央研究院語言所の李壬癸、アメリカの Blust の学説が著名）。この学説には多くの追随者がいます。しかし、私見によれば、台湾をこのような開放的な空間環境のなかで、この族語エリアの最北端に置いて、全エリアの言語の発信地であるというのは、全く説得力を持ち

ません。しかし台湾南島の言語が異なっているのは、既成の事実ではあります。現在では、仮に平埔族が既に消失したか、あるいはまもなく消失するだろうと考えられているとしても、現存する 42 の言語の存在は、それ自体、言語の多様性を明らかに示しています。これは多元文化論の基礎となりますが、またエスニックグループの政治が複雑に入り組む要因



第1図 台湾原住民族の原郷

第1表 台湾原住民族の分布 (2005年9月30日現在)

| 部族名 | 阿美 Amis | 泰雅 Atayal | 排湾 Paiwan | 布農 Bunon | 魯凱 Rukai | 卑南 Puyuma | 鄒 Tsuu | 賽夏 Saisiyat | 雅美 Yami | 邵 Thao | 葛瑪蘭 Kavalan | 太魯閣 Truku | その他 | 総計 |
|-------|------------|--------------|--------------|-------------|-------------|--------------|-----------|----------------|------------|-----------|----------------|--------------|--------|---------|
| 合計 | 171,518 | 87,589 | 81,002 | 47,633 | 11,338 | 10,547 | 6,172 | 5,532 | 3,599 | 569 | 872 | 10,592 | 25,496 | 462,459 |
| 平地 男子 | 85,938 | 1,209 | 7,933 | 258 | 1,056 | 5,257 | 33 | 1,870 | 49 | 290 | 460 | 31 | 5,736 | 110,120 |
| 女子 | 83,413 | 1,439 | 7,961 | 387 | 1,071 | 5,094 | 36 | 1,848 | 70 | 269 | 411 | 52 | 5,198 | 107,249 |
| 平地小計 | 169,351 | 2,648 | 15,894 | 645 | 2,127 | 10,351 | 69 | 3,718 | 119 | 559 | 871 | 83 | 10,934 | 217,369 |
| 山地 男子 | 910 | 41,642 | 32,165 | 23,425 | 4,528 | 74 | 3,003 | 928 | 1,765 | 2 | 0 | 5,055 | 7,412 | 120,909 |
| 女子 | 1,257 | 43,299 | 32,943 | 23,563 | 4,683 | 122 | 3,100 | 886 | 1,715 | 8 | 1 | 5,454 | 7,150 | 124,181 |
| 平地小計 | 2,167 | 84,941 | 65,108 | 46,988 | 9,211 | 196 | 6,103 | 1,814 | 3,480 | 10 | 1 | 10,509 | 14,562 | 245,090 |

資料：行政院原住民族委員会「原住民族群人口数」

ともなるのです。

16世紀以降、西欧諸国による植民帝国主義が拡張して、地球全体にそれらの勢力を広げました。台湾はまず始めにオランダとスペインの勢力によって統治されました。その後、中国から明の鄭王朝と大清帝国の支配が及びました。日清戦争の後に、割譲されて19世紀末に始まった日本統治が51年間続きました。そして終戦後、台湾島は中国からやって来た国民党政府のわずかばかりの国土となりました。このように、長期にわたって台湾の統治政権は、いずれも外来勢力によるものだったのです。つまり、台湾島の政権は台湾本土からは生まれてこなかったのです。政権は長かったり短かったりで、随時入れ替わりました。こうした状況は1980年になって、構造的な変化を現わしはじめました。さらに美麗島事件(1979年)の後、(国民党)党外の政治反対運動からの激励を受けて、台湾はついに20数年を経て破竹の勢いで台湾「本土化」運動の主流を形成したのです。原住民運動はこの本土化運動の枝分かれたもので、その後、発展するにつれて、独立した樹木のような民族運動となり、漢族の人々に主導される運動

と距離をとるようになりました。エスニックグループの観点から見ると、本土化がエスニックグループの分岐した運動を生み出すにつれて、過去の外省人と本省人の対立とは異なっており、80年代には閩南人^{びんなん}一客家人一外省人一原住民の四大エスニックグループ間の対立という関係に転じるようになりました。そして、90年代にはエスニックグループ同士の対立が激しくなり、台湾人と中国人という二つの民族主義の競争に変化するようになりましたが、原住民運動の発展は、漢族の人々の民族的アイデンティティの競争と衝突の隙間を縫って前進していったのです。さらにこの漢族間の民族主義によって相互の関係に対する意識が高まると、原住民主義の意識も次第に高まり、三者が対話したり戦いを交えたりする状況が生じるようになりました。

「本土化運動」は英語では‘indigenization’と言います。これが言わんとしているのは、漢族の移民たちが台湾のよそ者とか旅人の身分から抜け出して、台湾を家として、台湾をこの世で生きる立脚点にしたいと考え、大陸に刃向かい攻めることをやめ、極端な場合「祖国」の統一をずっと思い続けるということ

やめることなのです。しかしながら、この言葉は原住民の考えとびったりあっています。というのも本土化運動の出発は、原住民運動そのものとむすびついたからです。しかし、それに続く発展についてみると、わたしたちが目にしたのは、漢族の人々の主導する運動は本土を強く主張し、漢族の人々を主体とする台湾人民族主義だったのです。いいかえれば彼らの運動において、原住民は引き立て役にすぎなかったのです。しかし、まもなくそれぞれが自分たちの目指す方向に進んでいきました。台湾原住民に対する呼称である「山人」とは、直接にはその原住民族の元来の意味から取ったものですが、世界各地の原住民族と同様に、新しい名詞は新たなアイデンティティとなりました。さらに漢族系の閩南人を筆頭とする台湾民族と区別するものなのです。

初期の原住民運動

ここでは原住民運動の発展のあらましを1990年より以前、ということで区切っています。ここでは、1990年代と21世紀に入って以降の発展からふりかえった観察と描写が試みられます。1983年台湾大学の原住民学生は手書きのガリ版刷りで秘密裏に『高山青』という雑誌を発行しました。原住民族を滅亡から救い存亡を図るという理念を認知してほしいと提起して、原住民のクラスメートに幅広く配られました。これは当時戒令下に置かれていた大学キャンパスを震撼させ、国民党の党組織が全力をあげて押さえ込み圧力を加えるということを生じさせました。しかし、高山青の思想言論は、またたくまに伝わって、長期にわたる国民党に反対する党外組織の賛同と支持を得ました。これはさらに少数民族

委員会の設立へと結びつきました。当時の党外組織にはいろいろな人がいました。後に民進党の要員になった人もいますし、左派のマルクス主義者を標榜する信徒もいました。しかし、短期間に協力して、原住民運動の人々は1984年に「原住民権利促進会」(原権会)を設立し、原住民の自分たちの道を歩き始めたのです。また、原住民運動が発展した要因に、原住民キリスト長老教会団体が支持してくれたことが不可欠の力となったことがあげられます。とくに、長老教会を欠くと、原住民運動は根底から成功することができなかったかもしれません。この時期、一方では組織を調整することを進め、もう一方では台湾主流社会を震撼させる街頭での抗争運動をはじめていきました。

簡単に述べますと次のようになります。

正名運動(名を正しく改める運動)の推進(1984)

国外の原住民族を参照し、英語の *aborigine* の意味にもとづき、「山地同胞(山胞)」を改称して「原住民」としました。はじめはまだ「族」をつけていませんでした。まもなく1987年「原住民族権利促進会」と改められましたが、台湾の学界、主流社会の反対と論議が湧き上がりました。けれども、最後には社会でひろく尊重され、ひろく使われるようになりました。ただ公式には1993年になってやっと政府当局の同意を得ました。正しい名となりましたが、実際には全く新しい名前です。真の意図は民族 (*peoples, nation*) という一語にあり、集団的な固有の権利 (*inherent rights*) の主張、特に民族自決 (*self-determination*) などに関する権利を暗に含んでいるのです。しかし当局に何度も回避されました。けれども、

最後にはこの国際的な潮流に逆らうことができず、中国人は「必也正名乎 [必ずや名を正さんか/きっと名を正しくすることだろうね]」（『論語』・子路）と言います。原住民運動の人々について言えば、まず「名を正すこと」を勝ち取ったのです。その後の運動は正当性 (legitimacy) を得ましたし、それ以後の主張と訴えのすべてが、その本体が一つの民族であるので正当であり当然のこととなったのです。しかし、本当の名前が各民族の族名であることは間違いありません。

呉鳳の件への抗議

呉鳳は清の時代、阿里山ツォウ族地区の通事 [通訳] でした。漢族の人々の教科書は、ツォウ族が悪徳商人と考えている呉鳳を神格化して、ツォウ族の首狩の古い風習を改めさせた英雄としました。さらに学校の歴史教材にして、原住民を野蛮で残酷なイメージに作り上げ、原住民に不名誉な感覚や自虐感を生じさせました。阿里山地区の漢族の人々は呉鳳の神像を崇拜したため、呉鳳廟があちこちに建てられました。ツォウ族の所在地も呉鳳郷と呼んで、ツォウ族が呉鳳を殺害した張本人だと説明しました。さらに嘉義市の駅前にも呉鳳の銅像を建てて、原住民のマイナスイメージを強化したのです。そこでツォウの人々は一連の抗議を行い、ついには目的を果しました。教材は削除され、銅像は引き倒され、呉鳳郷は阿里山郷と改められたのです。

政府と財閥が道路開発のためにブヌン族の祖先の墓を暴いたことへの抗議

この事件によって国家の暴力的な面が暴露されました。統治者はつねに発展と進歩という大義名分によって、企業など民間組織とともに意のままに原住民の土地資源を略奪する

のです。この事件は、その中でもかなり深刻な事例の一つにすぎません。

外国に拘留された原住民漁民のための行政院に対する請願

原住民は 1980 年代、大量に原郷を離れて都市へ行き、生計を立てたり学校で勉強したりしました。文化が違い、教育に落差があるため、当然ひどく差別 (discrimination) されて、ほとんどが低層の労働者階級、例えば炭鉱労働者、遠洋漁業従事者、建築現場労働者、工場の単純労働者などに転落しました。多くが臨時雇いで、掛け持ちで、危険で、きつくて、低賃金で、保険の無い肉体労働者となりました。女性の多くは、娼婦にされてしまいました。しかも多くが少女売春です。この当時の原住民運動の仕事は、ほとんどが都市原住民と協力して当然持つべき權益を勝ち取ることで、その悲惨な生活に対応したものでした。外国に拘留された原住民漁民のための行政院に対する請願も、その一つでした。

少女売春への抗議運動

女性団体がともに協力して少女売春婦がもっとも集中している台北の華西街に行き、業者と客に抗議しました。女性の訴えを結集したことによって、まもなく社会の支持を得ることができました。しかし、その効果はあらわれないままです。

三度のわたしたちの土地を返せ運動 (1987-1993 年)

台湾はもともと原住民の土地でした。日本統治時代、蕃地 (注: 原住民のテリトリー) はまだ 170 万 ha 余りありました。しかし、現在、国民党政府の保留地は 24 万 ha にすぎません。その中には政府や個人に占拠されているものもあります。原住民人口は日本統治時

代の8万人から、現在は46万人にまで増加しています。いちばん重要なことは保留地管理弁法が法律ではなく、行政命令でしかないことです。もしも法律に抵触すれば、効力がありません。

三度の土地運動によって、その深刻さが明らかになりました。なぜなら政府は1万ha余りの土地を編成しただけで、決して原住民に返さなかったため、原住民の土地はふえませんでした。原因は国家こそが土地の所有者だとして、原住民の土地所有権を決して認めないからです。

1990年代の発展

わたしたちの「土地を返せ運動」[還我土地運動]は、原住民運動の発展のピークであると言えます。数千人もの人が参加したため規模が非常に大きかったというだけでなく、さらに第三次運動の訴えの対象は、行政院から外交部に移り、原住民運動団体が突出して体制外の路線を歩き出したために、民族主義的な性質をよりいっそう確かなものとしたのです。しかし、前期の運動は絶対多数に訴えて、主流社会や政府当局に受け入れられたのですが、三次土地運動の後には、原住民運動は国民党に憲法を修正改定する契機だと叫んで、原住民族の憲法記入をもとめることに転換していきました。これはつまり原住民を正式に新たに修正される憲法の中に書き入れて、原住民族の権利の保障と法律根拠にすることです。原住民族の権利の訴えは、1985年、台北市原住民事務委員会を成立させ、翌年、行政院原住民族委員会を成立させることにつながりました。この時、原住民運動のリーダーたちは散り散りに新たに成立した官僚体制の中に入って仕事に就いた

り、あるいは政党に加入したりしました。一時期、原住民権利促進会の組織は動力をなくして二度と動かないかのようにになりました。

しかしながら、原住民運動の遠くはるかな自治の目標はまだ達成していません。原住民運動団体は離散集まりましたが、もともと過去の原住民運動団体の多くは都会の新しい世代の知識人たちであり、その都会抗争の色彩によって批判され、部落の人々が離れていきました。そこで、90年、原郷に回帰する「部落主義」論があらわれ始めました。これらの部落にもどった青年は、もともと部落にいる同じ族の人々と結びついて、部落再建運動を展開したり、母語を文字化して伝承していく仕事をしたり、部落の歴史地理を再建したり、コミュニティの建築建造に関わることによって部落の産業経済、エコツーリズム、手工芸などの色々な仕事を発展させたりしました。前期の運動と比べると、この時、重心は部落の現実的な要求にあって、抗争的色彩は減っていました。これらの部落での活動のほとんどが、ある程度、政府の支持を得ました。しかし、逆に、真の自主性は損なわれ、多くは、模倣だったり流行を追ったりするものとなりました。また部落が政府の資源を得たために、部落同士や部落内部のメンバーたちの性の悪い競争が生まれました。その結果、運動は停滞し、前に進めないようになりました。部落の活動がこのようになってしまったために、民族全体こそが運動の主体であるということが曖昧になってしまったのです。

このような状況ではありましたが、ツォウ族、ヤミ族、タイヤル族らは、各自の民族構築運動を発展させました。たとえば、ツォウ族は「鄒是会議」を開始し、20世紀末、「民

族議会」に作り変えようと試みました。このため、文化芸術基金を設立し、直接的に文化教育事業に関わっていきました。それは、政府の政策に関与するためでした。しかし、政府の体制の中にいるツォウ族出身の地方官僚や体制的な路線をもとめる人々の抵抗にあり、停滞し、前進できませんでした。タイヤル族は1999年はじめてタイヤル民族議会を設立しましたが、長老教会の牧師の主導だったため、民族議会は宗教の枠組みを超えることができませんでした。蘭嶼のタオ（ヤミ）族は、核廃棄物貯蔵施設があるために、核廃棄物が長年にわたり蘭嶼島に置かれているということに反対抵抗して、まっさきに民族議会の設立を宣言しました。しかし、宗教、政党、政府体制の介入や紛糾のために、有効に民族議会を運用するのは容易ではありませんでした。他方で、ツォウ族とタイヤル族の議会メンバーはブヌン族と連合して、1999年自発的に民族議会のシンポジウムを挙げて、それによって相互交流を深めました。

この民族議会のシンポジウム1ヶ月後、世界を震撼させた台湾中部大地震[9.21集集大地震]が発生しました。被災地域では原住民部落の家々も含まれ、多数の死傷者を出しました。しかし原住民部落は僻地にあり、地震の救援は漢族の人々のコミュニティに集中し、原住民の被災状況を問う人はほとんどいませんでした。そこで「部落工作隊」ができ、救援活動にあたりました。この組織は一部の原権会のメンバーを吸収しましたが、漢族の人は中国マルクス社会主義者を主としていました。いちばん必要な時になって原権会の機能が継承されたようでした。被災地から新たに原住民運動のパワーをもらったのです。す

ぐれた言論とメディアの力があいまって、政府の長期にわたる原住民差別と不当措置を明らかにし、社会の極めて高い関心を集めました。

震災がおこったのと同じ年（1999年）、陳水扁が民進党の総統候補となりました。陳総統候補は、原住民の12の民族の代表と蘭嶼島で「原住民族と台湾政府の新しいパートナーシップ条約 [原住民族と台湾政府新的夥伴関係条約]」に調印しました。調印の際の代表は、長年、原住民運動のリーダーを担ってきた人々で、この条約には原住民族の自然主権、原住民族の伝統領域の返還など画期的な条文を含んでいました。こうして、21世紀の台湾原住民族運動の新しい世紀が開かれたのです。

21世紀の発展

陳水扁が総統に当選したことにより、原住民族の自治は新政府の施政政策の事案となりました。原住民族の自治が、単に原住民族運動の人々のスローガンにすぎないということでは、もうなくなったのです。しかし、原住民族の運動団体が民進党と協力しつづけたために、原住民族の自治運動はここに至り政府に吸収され、民族議会組織はかえって動力を失いました。自治は地方行政の役所の仕事になりましたが、それは原住民族の目指したものではありませんでした。民族の自治は地方の既存の政治文化に落ちてしまっていて、民族の主体性は再び行政体制に蓋をかぶせられてしまったのです。原住民委員会は21世紀を起点として、一連の民族自治の計画と伝統的な領域の調査を開始しました。さらには伝統的習慣の調査を自治の準備段階として、多くの部落工作者、特に原住民運動の人々もその調査に加わりました。この時期、原住民運動

は、政府の計画を取り進めることに忙しくて、ほとんどなりをひそめてしまいました。しかし、まさにこうした事態により、国家の強い主導と政策は確実なものとなりえないことが明らかになったため、次なる原住民運動の再興が下準備されていったのです。

III. ツォウ族の運動

1993年より以前

「鄒是会議」より前に、教育程度の高い知識人たちは「旅北ツォウ族聯誼会」を設立し、『鄒季刊』を発行しました。これは原住民の中で一番早い動きでした。1990年ツォウ語工作室を組織し、ツォウ語の文字化運動と民族語教育をはじめ、民族語字典を編纂しました。また一方で、ツォウ族の伝統的な祭典は停止されていないことから、伝統的なリーダー[頭目]の権力は衰えてはいましたけれども、祭典は民族のアイデンティティとなり、祭典の挙行は伝統的なやり方にとどめて、伝統社会モデルにも活力を見出せることを示しました。経済面では、漢族の取り次ぎ商人の搾取に対抗するために、阿里山合作農場と共同販売組織を創立すると同時に、伝統農業にもとづいた新しい農場経営の方法を提示し、単なる土地労働者に甘んじることから脱却し、企業化に向かって農民たちは邁進しました。

「鄒是会議」の時期

1993年、はじめての「鄒是会議」が開かれました。完全にツォウ族の人が自発的に組織した会議です。ツォウ族の立場と観点から、ツォウ族社会に内在する事柄を討論し、自分の職業的な身分を捨ててツォウ族の身分にもどって

会議に参加しました。目的はオープンな対話によってツォウのことを論じることにあります。ツォウの共通意識をうちたて、ツォウらしさを探し、ツォウの民族意識を育てることによって、ツォウの民族構築(nation building)をすすめるようしました。会議の中では、伝統的なリーダーが改めて尊重され、現代政治の官僚たちは会議の中で報告するよう求められました。主客の地位を入れ替えることで、ツォウの主体性を明らかにしたのです。このあと「鄒是会議」は7度、挙行されました。その後の2年の間に、「鄒是会議」は「鄒族議會予備会」に転じました。このプロセスの中で、ツォウ族文化芸術基金会を設立し、『鄒訊』[ツォウ・ニュース]を出版しました。数多くの政府企画研究専案を処理し、ツォウ族の自治、伝統的な領域の調査、部落経営計画、ツォウ族自然文化センター計画、ツォウ族部落(コミュニティ)大学などに参画し、あらゆることに関わりを持って、ツォウ族の文教事務に主導的な影響力を持つようと試みました。これによってツォウ族の自治の準備としたのです。

鄒族議会の時期

2006年年初、ツォウ族議會は7年間の停滞を経て、ついに、改めて開催されました。この時はすでに機が熟したかのようでした。民族議會のメンバーと地方の行政機関が手を携えて協力し、一緒に推進しました。楽観的な予測では、今年の年末には目覚ましい発展を遂げるにちがひありません。

IV. 我自身の経験と役割：ポストコロニアリズムの視点

経験と役割

わたしはかつて、原住民運動の呉鳳の件への抗議と、わたしたちの「土地を返せ運動」に二度参加しました。また、「旅北ツォウ族聯誼会」を組織し、『鄒季刊』の編集、後には『鄒訊』の発行を担当しました。何度も何度も民族語研究、各種学習会を執り行ない、ツォウ語工作室の発起人のひとりとなりました。現在、鄒是会議の呼びかけ人、ツォウ族文化芸術基金会理事長、ツォウ族議会五人小組のメンバーでもあります。また、基金会理事長の地位もしくは学者という立場で、原住民族委員会の多くの研究計画案の主宰者となりました。例えば、自治企画、伝統的な領域の調査、山川の地名調査、コミュニティ作りのための組織、ツォウ族自然文化センターの計画、ツォウ族 *kuba* 部落大学の創設、ツォウ族 GIS 及び歴史地理教育センターの設立などなど、です。

理 念

わたしの、ツォウ族と台湾原住民族についての考えは次のとおりです。原住民族は国家に植民統治され、内なるコロニアル状況に置かれています。このコロニアルな状況は多くの要素が複雑に入り組んでいて、そのために原住民自身がふだん見抜くことができないものになっています。原住民の内なるコロニアル状況とは、言わば現代発展主義、国家主義、資本主義、個人主義、同化主義が総合的に作用することです。それらによって原住民は空しく原住民の身体を持て余すしかありません。身体に内在するのは漢族の主流の文化価

値体系と語彙の氾濫なのでから一。すなわち、彼が思考したり話をしたりする時、もう原住民の言葉によるものではありません。主流社会が彼に染み通って、話をするのです。原住民族運動は民族構築運動であることを確認しておかなければなりません。これはコロニアル状況から抜け出すこと、つまり脱植民地化 (decolonization) を意味しています。民族の自治とは、脱植民地化を達成するための必要な手段であり、目標それ自体を意味しているのです。

V. 未来への展望—結語

わたしには夢がひとつある

わたしには夢がひとつある

わたしは祈る その実現を

わたしは願う

この世界のツォウ族の子どもたち一人ひとりが豊かな文化の母なる土地の慈しみを受けて、たくましくすこやかに成長し、いつでも健康で楽しくしていますように。さらに、何度も実を結び、永遠に続きますように。

わたしは願う

ツォウ族の家、千年万年続く山川のように、無限の生命力が沈んでいます。すくすくと伸びた巨大に茂る原始林、ヒノキ、カエデ、雀榕 [ガシュマルの一種]、それだけでなく、豊かに息づく命がのんびりと生きています、水鹿、山ブタ、トビ、苦花…みなツォウ族と永遠にともに暮らしますように。

わたしは願う

ツォウ族の家庭ごと、お父さん、お母さん、子どもたちが、自分たちが共にタブーを守り、生産を共にし、運命を共にするもっと

大きな家族の一員だということをよく理解しますように。家族と家族の間は、クバ (*kuba* : 男子会所) によってしっかりと結びつき、ホサ (*hosa* : 部落) を作るのだということをよく理解しますように。すべての *hosa* が結合して、ようやくツォウ族全体を構成するのだということをよりはっきりと理解しますように。この脈絡によってすべての幸福、楽しみ、痛み、悲しみを定義づけ、感知し、そこから自己を位置づけ、自己を肯定し、自己実現しますように。

わたしは願う

ツォウのひとりひとりが、ツォウ族がそこにいだけでよいことなんだと深く信じれば、すべての努力ははじめて意味があるのです。だから、わたしたちはそれぞれが別の仕事についていても、異なる宗教を信じていても、異なる政党に参加していても、異なる教育、経験をそなえていても、故郷に住んでいても都会に住んでいても、明らかにツォウ族はわたしたちが唯一、原初的に集まり交わる核心なのです。わたしたちは違いを認め合い、仲間割れしないでおきましょう。違いや個人の目標のためにツォウ族を傷つけてはいけません。

わたしは願う

わたしたちは、ツォウ族が地球という村のたった一ヵ所に位置していることを理解しましょう。他の民族の特色を理解し、互いにもとめあい、たがいに助け合ひましょう。互いを尊重する同じ地平にいてはじめて、多角的な、お互いを認め合う、調和の取れた美しく良い世界を実現することができる、理解しましょう。だから、ツォウ族のすべてについて、自ら蔑んだり、元気をな

くしたりしないでいいのです。すべてが自信と勇気の生命の力をあらわしているのです。

わたしは願う

わたしの夢は、すべてのツォウ族の人の夢です。ツォウ族の友だちの夢でもあります。夢があるから、わたしたちはその実現を祈るのです！ (森岡ゆかり 訳)

〔付記〕本稿は、2006年5月31日、天理大学において開催された「中国文化研究会公開講演会」(天理大学中国文化研究会主催/天理大学アジア学科・天理台湾学会・高一生(矢多一生)研究会共催)に提出された *tibusungu'e vayayana, peongsi* 博士の講演原稿『台湾原住民族運動の回顧と展望兼論鄒族運動的経験』の翻訳である(訳: 森岡ゆかり・近畿大学非常勤講師)。この講演翻訳原稿の本誌掲載を快諾された同講演会の主宰者である天理大学国際文化学部の下村作次郎教授はじめ、同大学関係機関の方々にも心より御礼申し上げます。

さて、本稿の著者である *tibusungu'e vayayana, peongsi*、すなわち汪明輝博士(1959年生)は、台湾中部の阿里山を原郷とするツォウ族出身の社会地理学者である(前者はツォウ族名、後者は戸籍名)。*tibusungu* 博士は、1992年に国立台湾師範大学地理学系講師に就任、2001年、博士論文『鄒族の民族発展—一個台湾原住民族主体性建構的社会、空間与歴史—』により学位(国立台湾師範大学)を取得後、2002年に副教授に昇任し、現在に至っている。40名近い専任教員を擁する同地理学系の学部・大学院において、同博士は社会地理学、とりわけ台湾原住民族の社会地理学などの科目を担当している。

tibusungu 博士の社会地理学はフーコー、サイード、ソジャなどの思想や方法論に強く影響を受けたものであるが、彼の活動は、教育・研究のみならず、郷里の阿里山領域における、いずれの党派に從属することのないツォウの人々の内発的自立やコミュニティの復興にかかわる社会实践にも向けられている点は強調されねばならない。実際、彼は、本稿でもふれられているように、ツォウ族会議〔鄒是会議〕の設立発起人や財団法人鄒族文化芸術基金理事長として、また台湾行政府の中に設置された行政院原住民族委員会の委託研究者としても社会貢献を果たしてきた「休みなき実

踐者」なのである。彼のこうした社会実践と「デスクワークによる運動への参加」の成果については、別表を参照されたい。

他方、tibusungu 博士は、地理学界における原住民族・先住民族研究者の国際ネットワーク構築に積極的に関与してきたことについてもふれておかねばならない。たとえば2005年11月、国立台湾師範大学で開催された The 9th International Geographical Conference in Taiwan on “First Nations and the Fourth World: Living Spaces for Indigenous People” のオーガナイザーの一人として活躍したし、立命館大学地理学専攻の客員教授として在任中、オーストラリアのブリスベーンで6月30日から7月2日まで開催された IGC Workshop on Indigenous

Knowledges and Peoples' Rights で研究報告を行っている。こうして tibusungu 博士は、地理学者として、先住民族出身者として、そして台湾原住民族自治権回復運動の実践者として休みなき活動を行っているのである。

本稿は台湾原住民族をめぐる問題に関心がある聴衆を対象とした講演録であるため、注釈が付けられていない。より深く本稿を理解したい読者は、山本春樹ほか編『台湾原住民族の現在』（草風館）、また川路祥代「台湾原住民『知識人』ティブスング・エ・ヴァヤナ・ペオンシ（汪明輝）の思想的研究」（南方文化 33、2006年 印刷中）を参照されたい。（付記：藤巻正己）

tibusungu'e vayayana, peongsi 博士の主な著作

| (著書) | | | | |
|---------------------------------------|-----|--------|-------------------|--|
| 1 鄒族史 | 共 著 | 2001 年 | 文献会 | 鄒族の歴史および領域変遷史に関する論文集 |
| 2 阿里山郷志 | 共編著 | 2001 年 | 阿里山郷公所 | 鄒族の領域であった阿里山郷の歴史・地誌書 |
| (学術論文) | | | | |
| 1 台湾原住民主主義的空間性：由社会運動到民族発展 | 単 著 | 1999 年 | 国立台湾師範大学地理研究報告 31 | 台湾原住民の権利回復運動に関わる社会地理学的研究 |
| 2 台湾原住民族運動的回顧与展望 | 単 著 | 2003 年 | 新自然主義 | 張茂柱編『兩岸社会運動分析』所収。社会地理学の観点から台湾原住民権利回復運動の回顧と展望を試みた論考。 |
| 3 辺境或核心？台湾原住民族之空間解殖：鄒族空間营造的經驗 他、多数 | 単 著 | 2003 年 | 台東大学『辺境地区及其主体性』 | 周辺の状況に置かれてきた鄒族の空間的脱植民地運動・主体的空間構築の実践に関する社会地理学的論考 |
| (その他) | | | | |
| 1 台湾原住民族自治規画研究 | 単 著 | 2002 年 | 行政院原民会 | 「第一期行政院原民会委託計画案」所収。阿美・鄒族などを事例とした台湾原住民自治政策に関する調査研究報告書 |
| 2 原住民族伝統山川名称調査研究 | 単著 | 2003 年 | 行政院原民会 | 「第二期行政院原民会委託計画案」所収。台湾原住民の生活世界における山川の伝統的名称に関する調査研究報告書 |
| 3 原住民族伝統土地与伝統領域調査計画 他、多数 | 共 著 | 2003 年 | 行政院原民会 | 「第二期行政院原民会委託計画案」所収。台湾原住民の伝統的土地と伝統領域に関する調査研究報告書 |